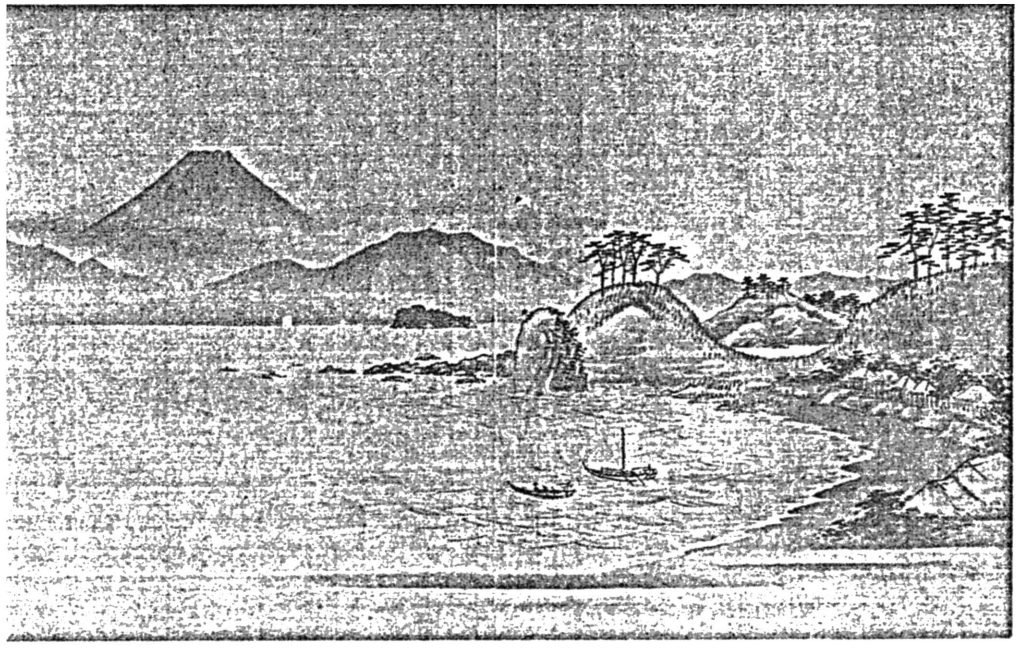
三浦半島の文化財
をたずねて

鵠沼 第59号

1991年 5月14日

鵠沼を語る会



武相名所手鑑の内・安藤広重「三浦秋屋の里」と題して描いた風景いです。広重一行は三浦半島を横断し相模湾側にでた。

ここは秋谷の里海岸である。現在もこの絵の構図と同じアングルから景色を眺めることができる。

「右に松をいただく梵天鼻と奇岩立石。海に浮ぶ江の島その向こうに横たわる大山。すり鉢を伏せたような富士山がひときわ大きく描かれている。」今もこの景色が残るは幸いである。

三浦半島の文化財
をたずねて

鵠沼 第59号

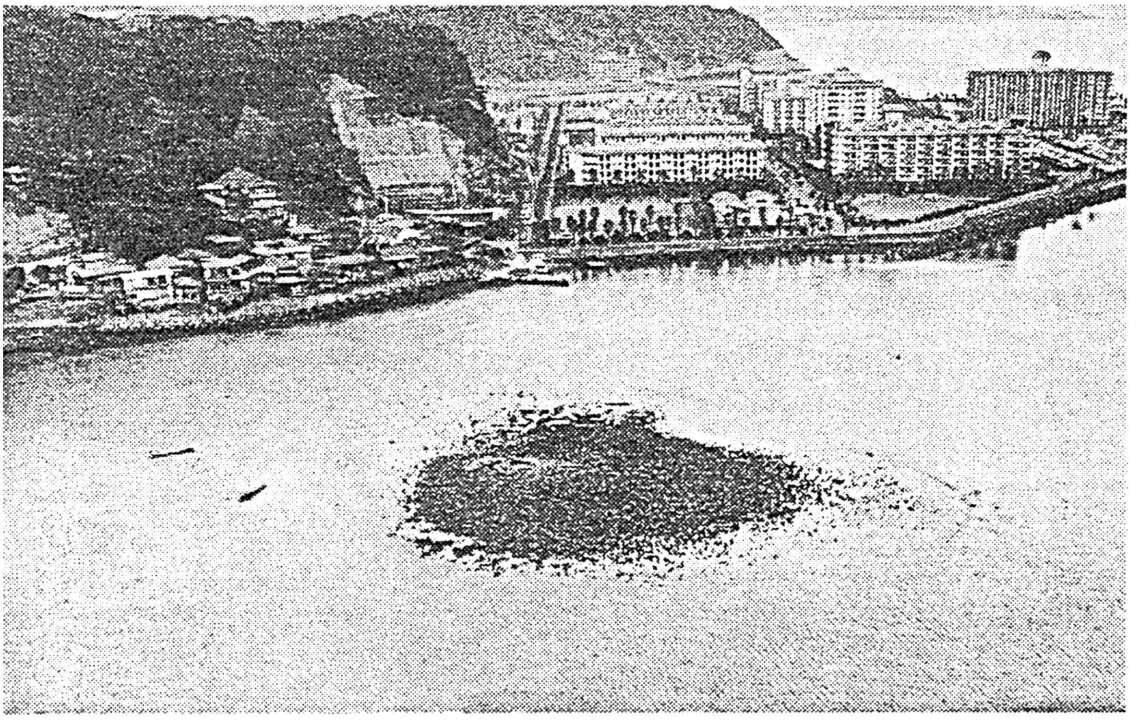
1991年 5月14日

鵠沼を語る会

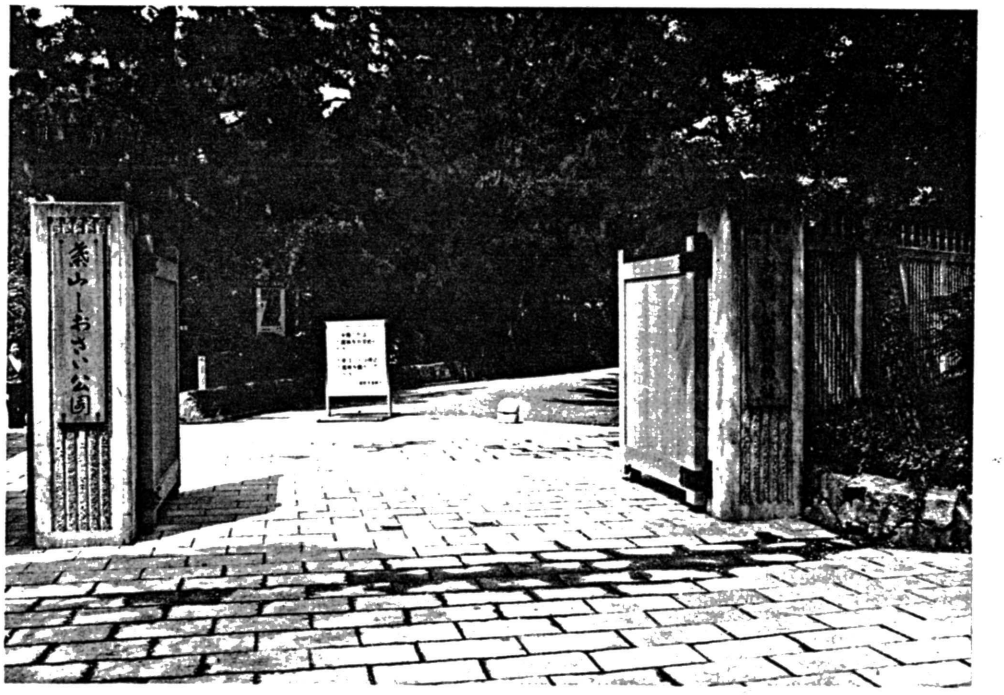
武相名所手鑑の内・安藤広重「三浦秋屋の里」と題して描いた風景いです。広重一行は三浦半島を横断し相模湾側にでた。

ここは秋谷の里海岸である。現在もこの絵の構図と同じアングルから景色を眺めることができる。

「右に松をいただく梵天鼻と奇岩立石。海に浮ぶ江の島その向こうに横たわる大山。すり鉢を伏せたような富士山がひときわ大きく描かれている。」今もこの景色が残るは幸いである。

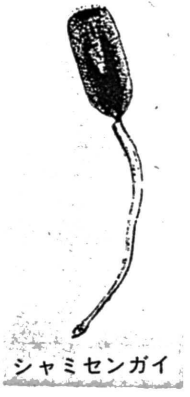


「和賀江島」干潮。海に島が現われる。わが国唯一の鎌倉時代の築港跡、満潮時にはほとんど海面下に没する。由比ヶ浜が遠浅で風波高く、難破する舟が多かったので、往阿弥陀仏は貞永元年(1232)7月、幕府に申請認められた。時の執権北条泰時。工事は同年7月15日から始められ。執権を始め諸人の助力によって翌8月9日に完成した。和賀江島は貞和5年(1349)ころ極楽寺が島を修理管理した。



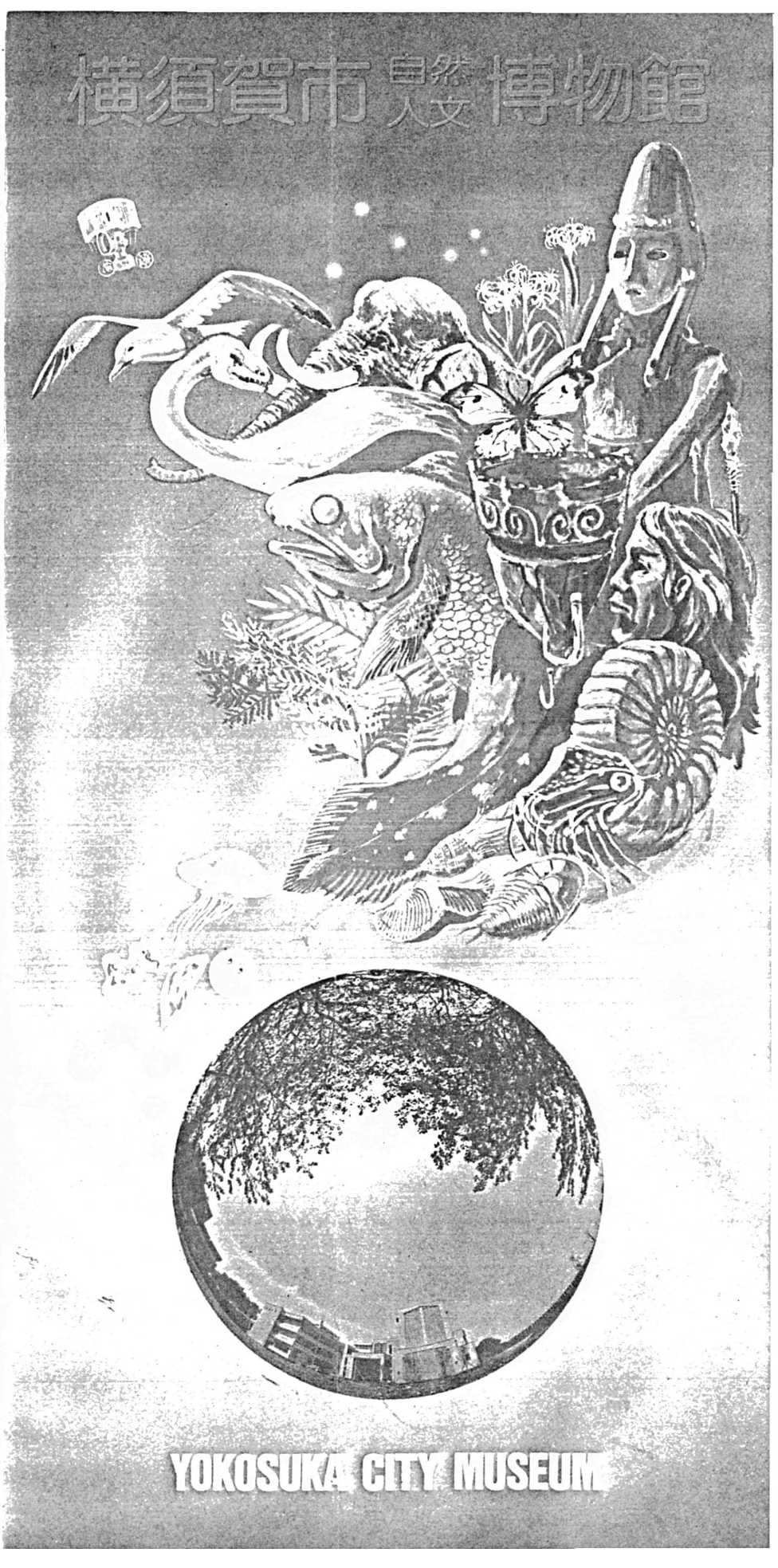
「葉山しおさい公園と博物館」

葉山一色御用邸について、明治２７年１月１日竣工。明治の半ば、ベルツ博士（皇室の侍医）とマルチーノ・イタリア公使が葉山を世に紹介してから多くの別荘が建てられた。有栖川宮別邸や英照皇太后・皇太子（大正天皇）が病気静養された。昭和天皇の「相模湾の海の生物」ご採集品や深海の珍しい生物が博物館に展示それている。


シャミセンガイ

博物館入口（旧御用邸付属邸の御車寄せを復元してある）

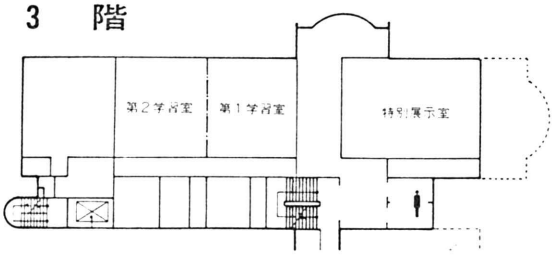
横須賀市自然博物館



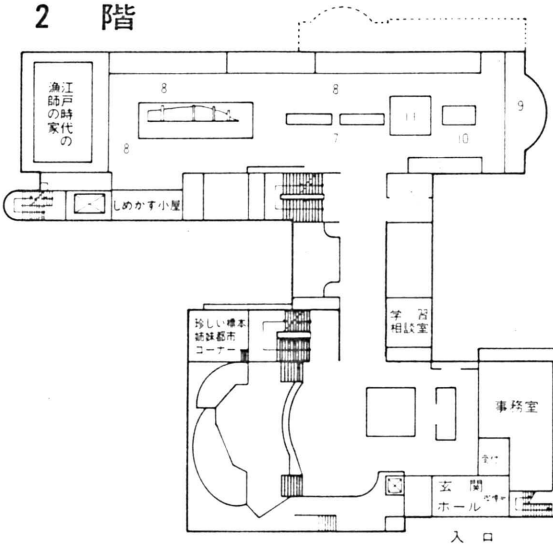
YOKOSUKA CITY MUSEUM

展示室案内図

3　階



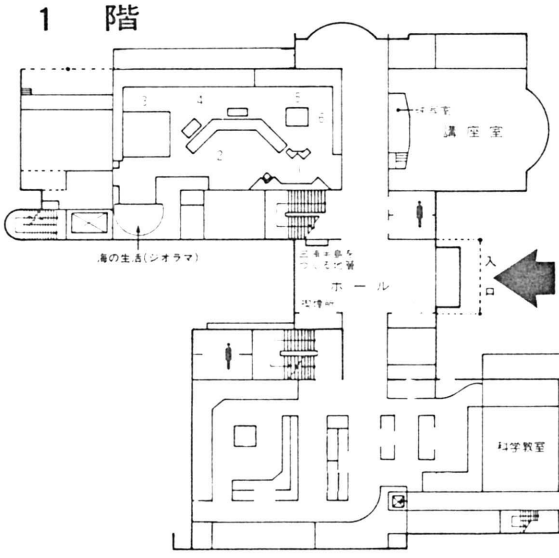
2　階



展示室〔人文〕

1. 三浦半島にヒトが住みついた
2. 採集の時代
3. 農耕のはじまり
4. 豪族の誕生
5. 都と三浦半島
6. 三浦一族と三浦半島
7. 江戸幕府と三浦半島
8. 村の暮らしと三浦半島
9. ペリーの来航と三浦半島
10. 横須賀製鉄所の開設と三浦半島
11. 三浦半島の昨日・今日・明日

1　階



展示室〔自然〕

- ナウマン象
- 三浦半島をとりまく地形
- 空からの三浦半島
- 大地は動く
- 三浦半島のおいたち
- 干潟ができるまで
- 三浦半島の森林（ジオラマ）
- 三浦半島の海岸（ジオラマ）
- 岩石壁面
- 発光生物
- 深海の生物
- 昆虫類
- 両生・は虫類
- 有毒・有害な生物
- 鳥類
- 魚類
- 三浦半島の哺乳類
- 海の生物
- 植物
- 生命の歴史
- 美しい石

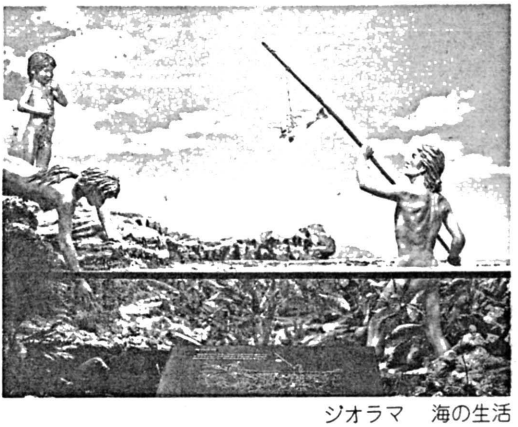
人文展示室（1階）

三浦半島にヒトが住みついたころから縄文・弥生・古墳時代を経て中世の三浦一族が栄えたころまでの歴史を見ることができます。おもに三浦半島から出土した土器や骨角器・埴輪などを展示しています。また、縄文時代の海辺での生活を再現したジオラマや古墳時代の住居の模型などからは昔の人々のくらしぶりを想像することができます。

採集の時代

約2万年前に三浦半島に住みついたと考えられるヒトは、1万年前の縄文時代早期には20以上の遺跡を今に残すまでになり、石器（石斧や磨石）・土器が残っています。縄文時代前期には大型の土器や石鏃・石槍・骨角器（釣鈎）・貝刃などいろいろな素材をもちいた道具が見られます。ここではおもに、吉井貝塚や茅山貝塚、上の台遺跡や内原遺跡から出土したものを展示しています。

縄文土器



ジオラマ　海の生活

農耕のはじまり～都と三浦半島

埴輪　「琴を弾く男子像」

2000年ほど前になると、三浦半島でも農耕が始まりました。人々は台地の上にムラをつくり、谷に田をつくりました。一方、海岸近くの洞窟や砂丘の上では漁労を中心とする生活も営まれました。このころから、土器は煮たき用のカメと貯蔵用の壺とにはっきりわかれました。

古墳時代になると貧富の差がしだいにはっきりしてきて、富や権力の象徴として大きな墓がつくられるようになりました。この古墳には須恵器・鉄器などが副葬され、古墳のまわりには埴輪が置かれることがありました。

奈良・平安時代になると、三浦半島には相模国御浦郡として都の支配を受けるようになりました。都の文書や当時の生活用具、宗元寺の瓦などから都との関係や人々の生活ぶりを展示しています。

三浦一族と三浦半島

鎌倉時代から戦国時代にかけて、三浦半島では三浦一族の活躍が目立ちます。ここでは中世武士団の生活を示す、当時の壺や瓦・かわらけ・磨崖仏などが展示されています。

人文展示室（2階）

江戸時代以降、現在までの三浦半島の歴史と様々な民具が展示されています。漁船や漁師の家、しめかす小屋などが当時のままに再現され、臨場感にあふれています。また、農具や漁具とともに、綿作り・麦作り・漁業などのようすを背景の日本画でわかりやすく説明しています。

江戸幕府と三浦半島

按針塚でなじみ深いウィリアム・アダムスをはじめとして、三浦半島の当時の中心地浦賀と江戸幕府との密接なつながりが示されています。江戸時代の灯台である西浦賀の灯明堂が模型で再現され、明治になって初めてできた洋式灯台である観音崎灯台と比較してみることもできます。壁には大きな浦賀湊絵図があり、毎日多数の船の出入りで栄えたころをしのばせます。

浦賀湊

村の暮らしと三浦半島

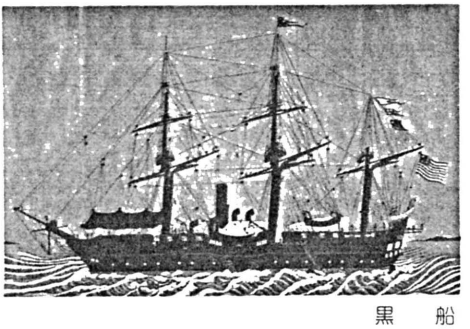
江戸時代の中ごろから新たな産業が発達し、木綿の栽培とはたおり、肥料としてのほしかやしめかすなどが作られるようになりました。ここでは縦に切断された実物の地曳網船が網やウキダル・櫨・タコツボ・マイワイなどとともに展示されています。そのほか、当時のようすが模型や絵で再現され、漁のようすがよくわかります。

漁師百姓の家は 140年前に建てられたものを組み立て直しました。三浦木綿は、江戸時代には三浦半島の特産の一つに数えられ、その栽培からはたおりまでのようすが、ワタクリ・イトグルマ・ザクリ・イトマキユミなどの道具と作業のようすを絵に描いたものによって展示されています。また、半島の台地の上では木綿のほかに、大麦が作られていました。これもフズキグワやトウミ：ウスなどの実物と絵によって展示されています。

マイワイ

ペリーの来航と三浦半島

1853年（嘉永6年）には、ペリーが久里浜に上陸し、日本の開国に大きな影響を与えました。当時のようすを知ることのできる絵巻物がたくさん残っています。それらのなかから黒船来航図などを展示しています。



黒　船

横須賀製鉄所の開設と三浦半島

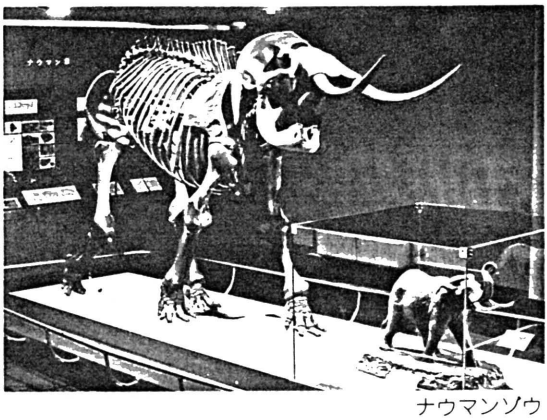
1865年（慶応元年）に当時の横須賀村に開設された横須賀製鉄所のようすが模型で展示されています。小栗上野介忠順やフランス人技師ウェルニーらの努力による水道の建設・レンガ作り・観音崎灯台の建設などが当時のレンガや水道管・設計図などによって展示されています。

自然展示室（2階）

三浦半島のおいたちや三浦半島をとりまく地形、また三浦半島の森や海のようすとそこに生活する生物について展示しています。

ナウマンゾウ

過去6500万年の間に、およそ 350種のゾウのなかまが繁栄したといわれています。日本にいたゾウのなかまは当時、陸続きであった大陸からやってきました。ナウマンゾウの化石は日本各地の海底や洞窟堆積物からも見つかっています。また、土木工事が行われるときにもしばしば発見されています。三浦半島では横須賀市の米軍基地内や長井町大木根から、周辺の地域では鎌倉市腰越・横浜市鶴見区上末吉町・藤沢市天岳院下・平塚市上吉沢から発見されています。



ナウマンゾウ

三浦半島をとりまく地形

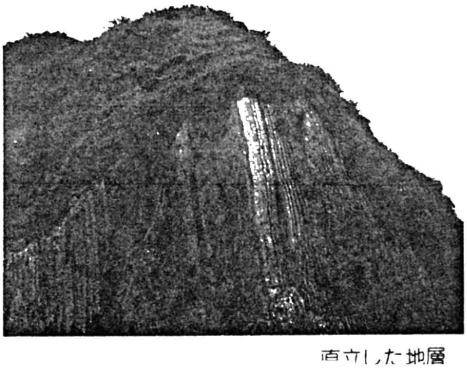
三浦半島を中心に、東は房総半島、西は駿河湾、北は東京北部、南は神津島沖まで水平方向の縮尺1:50000、垂直方向の縮尺3:50000で展示しています。この地形模型には最近の地球科学の研究成果を大きく取り入れ、海底のようすや地震の巣といわれる相模トラフなどが一目でわかるようになっています。

三浦半島のおいたち

三浦半島で知られているもっとも古い岩石は約5000万年前の海底に流出した溶岩です。

これらを含む葉山層群は三浦半島の基盤となっています。1000～ 500万年前の三浦層群堆積当時は東西に細長い２列の島が海上に浮かんでいました。その後、上総層群堆積期、成田層群堆積期を経て、約２万年前には世界的な気温低下により海水面は今より 130m も低下しました。そのために東京湾は干上がって平野が出現し、そこには古東京川が流れていました。

逆に縄文時代の早期は今より暖かく、海水面は今より３～５ｍも高いところにありました。地質時代から変動の激しかった三浦半島の地殻は現在も活発に活動しています。



直立した地層

ショウジョウトンボ

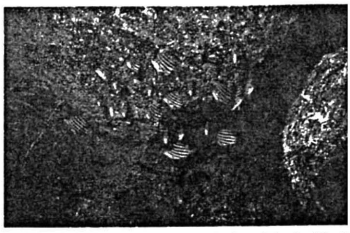
自然展示室（1階）

三浦半島の自然を海辺の生物・魚類・昆虫類・鳥獣類・植物などについて詳しく分類展示するとともに生命の歴史を紹介しています。発光生物に関する展示は世界で唯一であり、本館の大きな特色となっています。

三浦半島の動植物

三浦半島は、黒潮の影響を受けるために年間を通して温暖な海洋性気候であり、このことが動植物の分布にも反映しています。たとえばハマオモト（市の花）は横須賀市天神島を自然分布の北限地として神奈川県の天然記念物に指定されています。またその他の動物や植物などの分布をみても、よく知られた生物の分布境界線（本州南岸線）が通っています。

水田や用水路周辺は工事などにより壊され、淡水生物（魚類・水生昆虫類ほか）が著しく減り、とりわけゲンゴロウ・ガムシなどの大型水生昆虫類がいなくなりました。しかしトウキョウサンショウウオやホタルなどはまだわずかながらその姿をみることができ、三浦半島の自然が残されていることを示しています。海洋生物は魚類・貝類・甲殻類・海藻類などが豊富です。クサフグの集団産卵が各地でみられるほか、特異な生活をおくるケシウミアメンボなどの海浜昆虫も発見されています。



カゴカキダイ

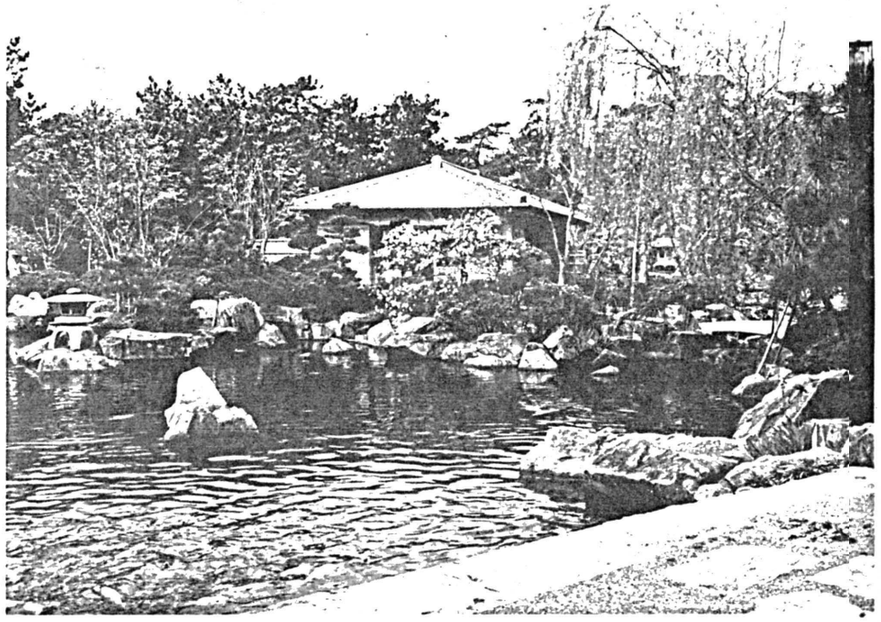
スカシユリ

発光生物

世界各地から収集された珍しい発光生物を独自な研究成果をもとに展示しています。海にはウミボタル・チョウチンアンコウをはじめとした多くの発光生物が知られています。魚類には直接自分自身で発光するものと、発光器の中に発光バクテリアを共生させて発光するものがあり、発光器の形や大きさは様々です。陸上の発光生物は、淡水生巻貝・キノコ・ヤスデ・ミミズ・カタツムリ・ホタル・キノコバエ・コメツキムシなどに限られます。これらのなかでホタルは最も種類が多く、世界で約2000種知られています。特に日本のゲンジボタルは幼虫時代に水のなかでくらす点で学術的価値が高いといえます。生物が発光する意義は餌の誘引、外敵をおどしたり、同種間の交信など様々ですが、全く不明なものもあります。発光は生化学的な反応によるもので熱をほとんど伴いません。

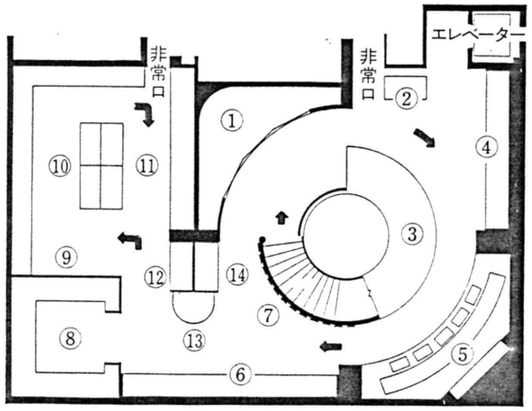
発光キノコ

ゲンジボタル



ナジマオトメウミウシ

展示室(地下)案内図



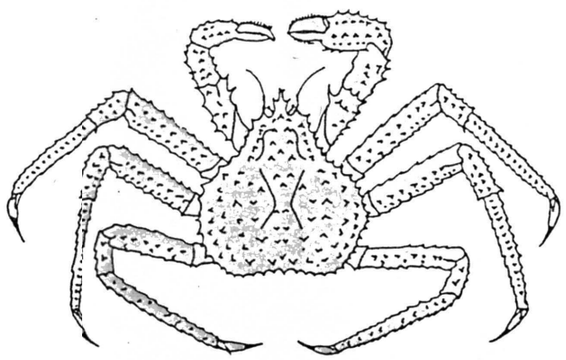
①葉山沖の深海(ジオラマ)
②葉山海岸で見られる魚貝類(水槽)
③漁具
④魚類
⑤相模湾の珍らしい標本
⑥海岸動物
⑦海藻類
⑧昭和天皇御下賜標本
⑨葉山の紹介
⑩軟体動物(貝類)
⑪節足動物(甲殻類)
⑫有毒生物
⑬相模湾に囲んだ動物
⑭相模湾を特徴づける深海の動物

※展示の一部を変更することがあります。

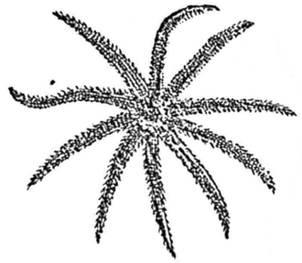
昭和天皇御下賜標本

イボエノシマサンゴ

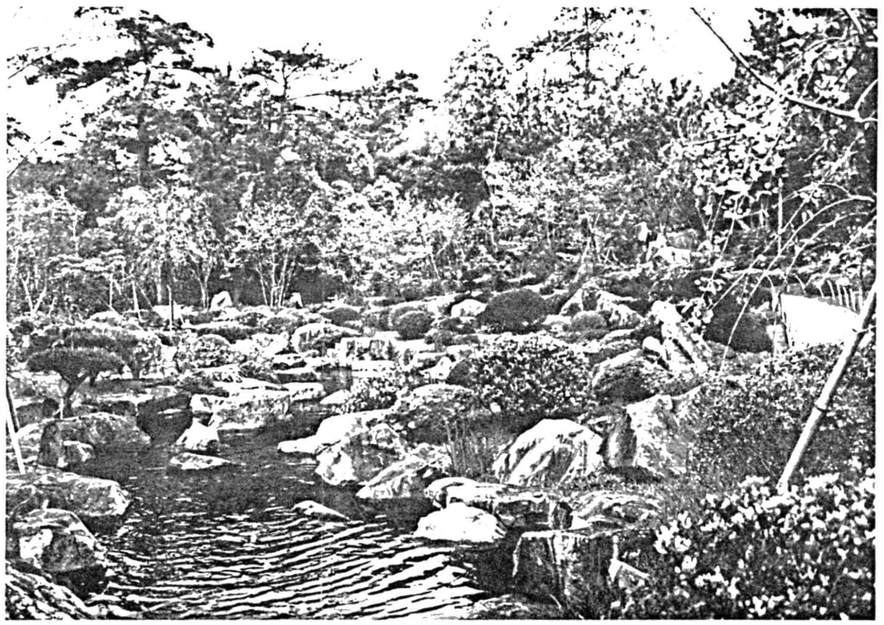
昭和天皇が葉山御用邸でご研究中に、葉山海岸周辺でご採集になった海洋生物の標本28点で、この中には新しく発見された種類もあります。

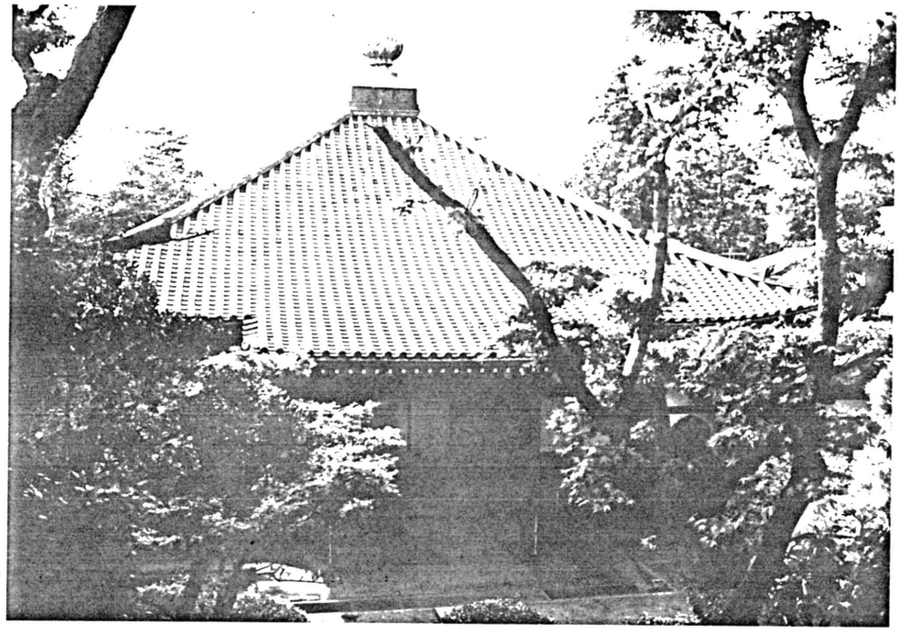


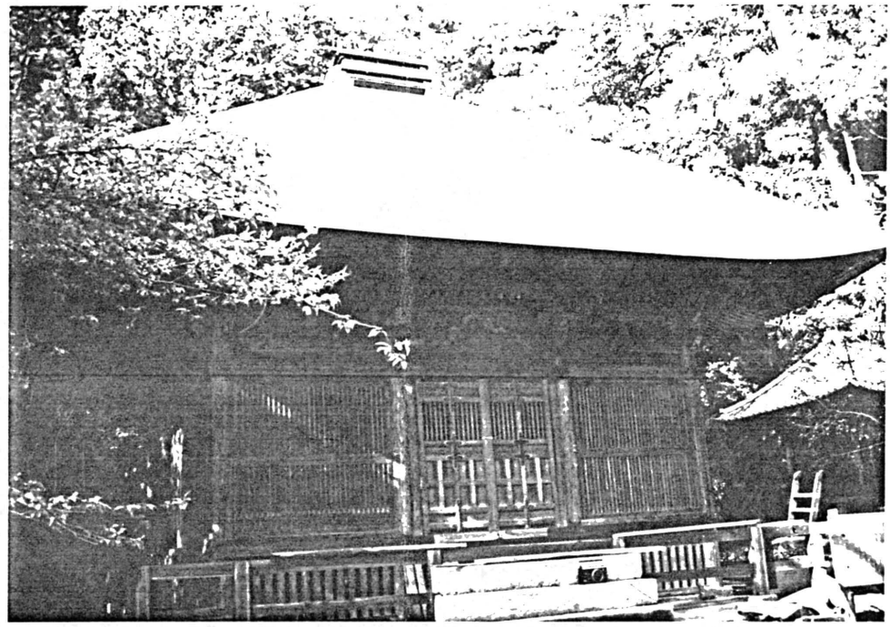
イバラガニモドキ

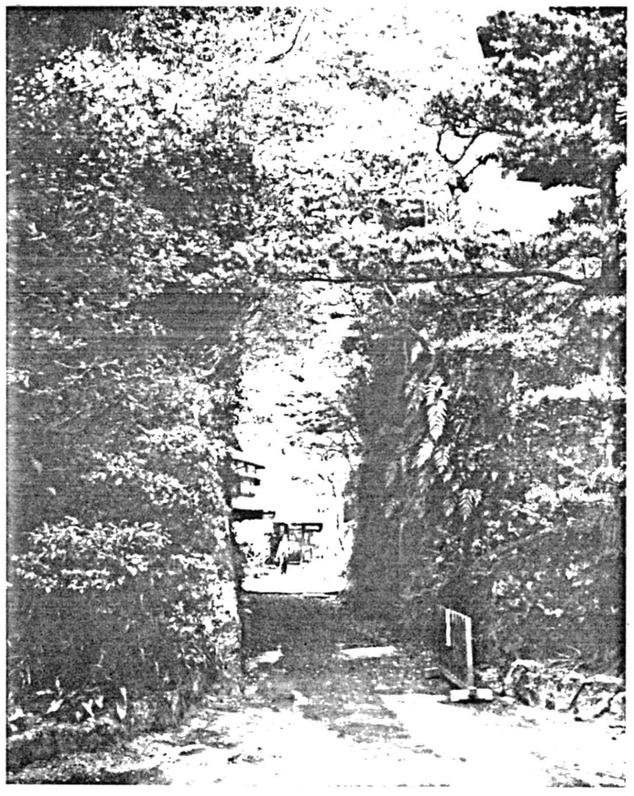


モロイソスナヒトデ

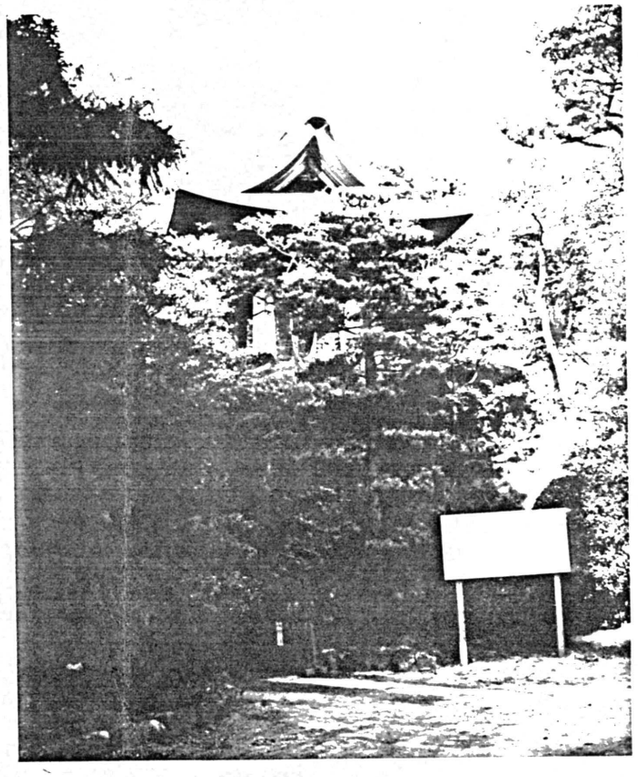


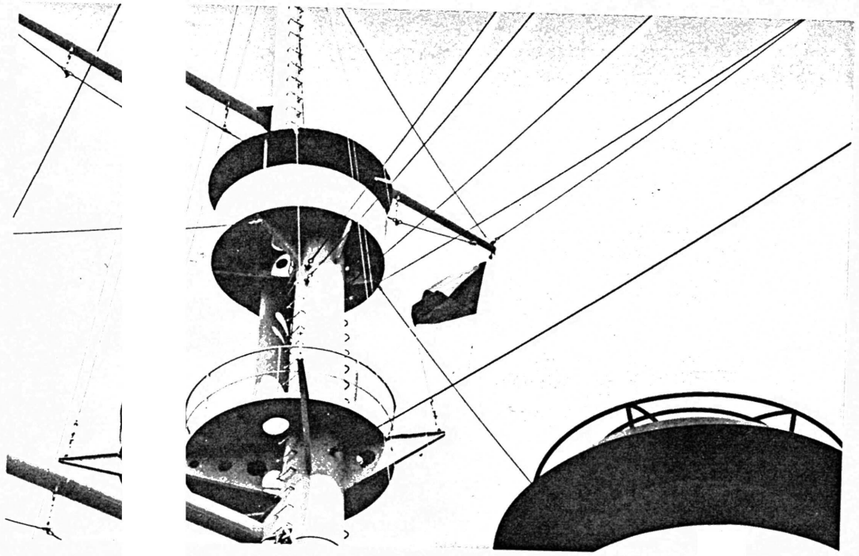


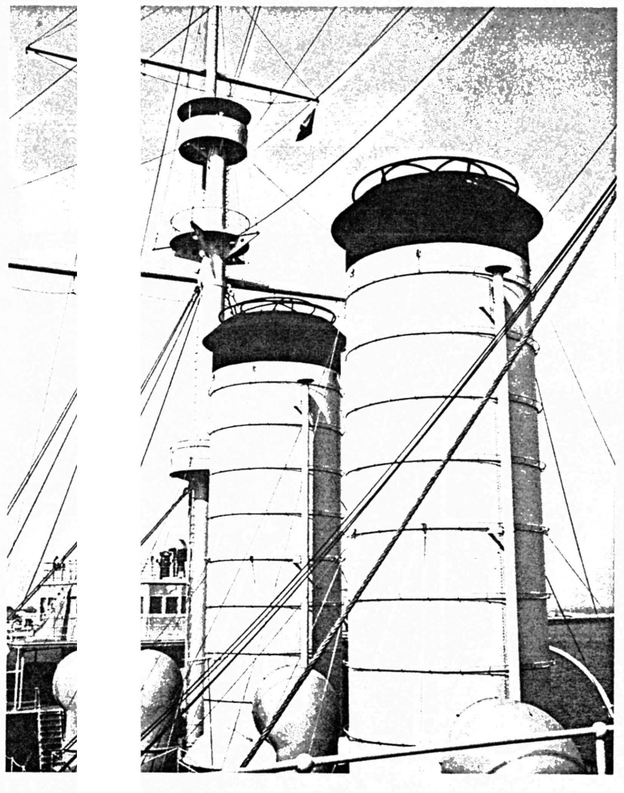




「神武寺」当山は、医王山神武寺天台宗今から約1,200年前神亀元年(724)正月、聖武天皇の勅願により、時の聖僧行基菩薩が本尊薬師如来、日光、月光の二菩薩を祭り、万民快楽の祈願道場として開山されました。本堂を少し登ると「女禁制」の石碑がありますが、これは大師が、日吉山王権現を勧請し、那智の三社を山頂に建立して一帯を清浄地と定めた。徳川時代御朱印5石拝領を受けました。







記念艦三笠の由来

三笠は 1904年(明治37年)2月に始まった日露戦争において、東郷大将が率いる連合艦隊の旗艦として、終始敵の集中砲火の中で奮戦し、同年8月10日の黄海海戦では露国東洋艦隊に大打撃を与え、遂に1905年(明治38年)5月27日の日本海海戦では、遠来のバルチック艦隊を全滅させる偉功をたてた日本海軍の代表的な軍艦であります。

日本海海戦の大勝利は、世界史の流れを大きく変えたと言われますが、この偉業を成し遂げた日本民族の誇りと自信を新たにするとともに、その栄光を永く後世に伝えるために、その「シンボル」として、三笠は 1926年(大正15年)以来収蔵する多数の記念品とともに、ここ白浜海岸に保存され、多くの人に親しまれてきました。

要　目

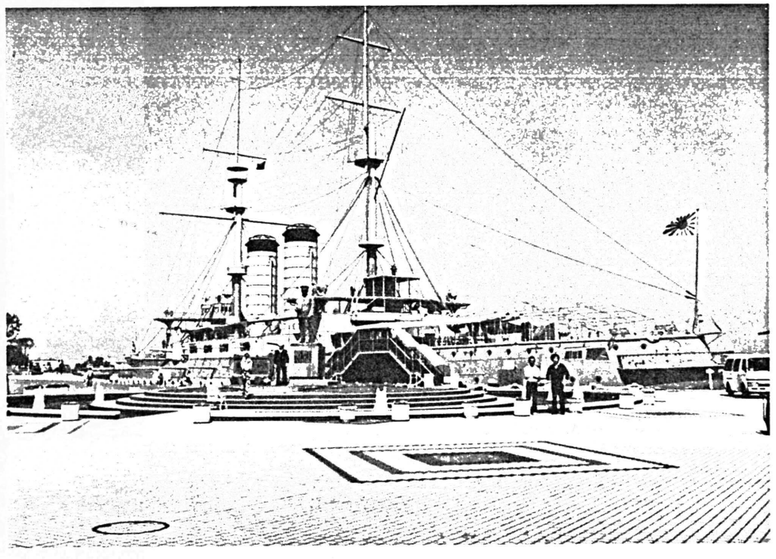
排水量	15,140トン
全　長	132 m
幅	23 m
軸馬力	15,000H.P
速　力	18ノット
砲	30cm×4
	15cm×14
	8 cm×20
発射管	45cm×4

三笠艦橋の図

この絵は、東郷平八郎元帥の名大作です。

記念艦

みかさ



長官公室